とりかえねば

ちょっとの違いだが、「とりかえばや」と言うと、男と女の仲を連想する。色褪せた「愛」や降り積もったしがらみを精算して、新しい女や男と改めてつき合いたいという、浮気願望である。

一方、夫や妻を「とりかえねば」というと、切迫感が漂い、ときに家庭裁判所に訴えるぞというニューアンスが滲む。

人の「愛」とは別に、生物はよわいを重ねるにしたがって老化する。老化だけでなく、ウィルスの感染症、糖尿病のような代謝障害によって体のあちこちが傷む。もし人の体を「機械」に例えるなら、部品に相当する体内の組織が、ガタガタしたり、詰まったり、濁ったり、機能低下したりする。機械であれば、部品を交換することによって全体の耐用年限が延びる。だから、生物の個体であっても寿命が延びるはずだと考える。

もし、医療技術の進歩が不十分で部品の交換を実行できなければ、あるいは「心臓」のように部品が簡単に供給されなければ、そのとき、現代の人は「とりかえばや」と思うにちがいない。逆に部品が容易に入手できるなら、「とりかえねば」と自分を説得し、医療費を払うはめになる。

かく書く筆者にも老化現象が忍び寄る。それは「老人性白内障」というやつである。しかし「老人性」とはひどく語感が悪い。糖尿病とか、アトピー性皮膚炎とか、ほかの要因による白内障を区別するのが目的で、お医者さんに悪意がないとしても。

白内障そのものは、われわれの眼でカメラレンズに相当する「水晶体」が白濁し、入ってくる光が散乱してまぶしかったり、あるいは光の通過が悪く、暗いところでの視力が落ちたりする現象。だが、年取るとなぜ白内障になるのかよくわかっていないという。60歳代で60から70％の人に白内障が見られるというので、もっと世間の話題になっていいと思うのだが、ほかの「成人病」に比べ、なぜか「日の目」をみていない。

しかし、手術法は確立していて、しかも短時間。濁った水晶体を取り除いたあと、水晶体の代わりにプラスチックレンズを挿入する。ただ、人工レンズは、本物とは違ってフォーカスを調節できないので、遠くに合わせれば近くが見えない。カメラには付いているオートフォーカスが、人間用に発明されないだろうか。

このように「機械論」に従い人間の部品を追求していって、究極はどうなるのか。アメリカには自己の根元と考える脳を液体窒素に保存し、将来ほかの「部品」が調達できるようになったとき、その人間の「再生」を請け負う商売があるという。

人間機械論はどこかで破綻するように思えるが、それはどのポイントにおいてか。